



恋しくて <
永遠> 下巻

みしまゆみこ

(四十一)

三島さんは、人としての信頼感で周りの人たちを大好きにさせる名人です、殆どの方が、直ぐに好感を持って付き合いたくなる人なのです。

普段の生活では、ジョージ君はアンカレジに住んでいて、彼が時間が出来た時だけ、ここに来て母の手助けをしていた。

その自然な親子関係がとても素敵だったし、誰もが心地よい好感を持てる母と子の姿だった。

やっと、ジョージのお勧めのフィッシングポイントに着き、釣り糸を流し、何度と、サーモンは食いつくけれど、その度に、あっさり、逃げられてしまう！

かなり、悔しくなって、純輔は、持ち前の負けん気をむくむくと、気持ちが荒くなってしまった！

この時点で、釣り人としては失格だったのでしょね！

純輔は今までに、何の魚釣りも経験のない、全くの素人だった！

だから、最初は、ジョージがアドバイスを送る事に従っていた、けれども、何度もサーモンにだまされて、逃げられるとだんだん意地になっていらだって来る・・・

「今度、ヒットしたら、絶対に逃さぬぞ！」

「自分に気合を入れ、念じて！、肝に銘じた！」

そんな純輔の苛立つ姿を見て、ジョージはすこしポイントを変えてくれて！

「ここ、ナイス、ポイント！」

「絶対ね！」

そう言って、ボートを停めた。

しばらくは、嘘だ！、何の魚の姿も見えないではないかと思った瞬間！

『私の体を大きく引きずられるように、強い感触の「引き」が感じた』

それと同時に、これは、大きいぞ！、もうこれ以上逃すものか！

私は身体中のエネルギーをひとつに集めて、「念力」をこめた！

ジョージが、大声で、アドバイスするが・・・

「引いて！」「ゆるめて」と何度も言いますが、もう、私の耳には届かない、いえ、何を言ってるのか、理解など出来ないし、理解しようと思わなかった！

私の全体重をかけて、一本の釣り竿を握りしめ、絶対に逃さぬぞ！サーモンの逃げようとするエネルギーはすぎましいものだった！

この釣りボートを私たち三人、高津さん、私、ジョージを乗せたまま引きずりながら、暴れ回る・・・

もう、ただ、ただ、逃したくない！と、必死で、サーモンと大格闘した。

その時間は、一時間はゆうに越えただろうか、やっと、私の粘り勝ちの勝利だった。

サーモンの大きさは180cmの大物、巨大な、キングサーモンだった！

このサーモンは、純輔に釣り上げられた事がよほど、悔しかったのか、釣り上げられた瞬間に！！！！

『私に、最後の抵抗をして、サーモンの体をピンク色に染めて！』

『そしては紅い血色の尾びれをおもいきり、私の顔に、一撃を与えて、こときれた』

その瞬間、私の右眼が、まるで、炎で焼かれるような、強烈な熱い痛さを感じて、失神して倒れこんで

しまった。

その瞬間、私は、すべての光が消えて、真っ暗な闇の世界に入ってしまった。

(四十二)

純輔はその時、何が起きたのか自分が何をしたのか？どうなってしまったのか、何も覚えてはいない！、意識を取り戻した時、純輔は、アンカレジの病院の治療室のベットの上だった。

医師の診断の結果、左目はすこし傷ついただけで、時期が来れば快復して、見えるようになるが、問題は右の目だ！右の眼球が酷く傷がつき、右眼の視力はもう、快復が難しいだろうとの診断だった。

あまりにも、一瞬の出来事で、純輔は混乱して、今の自分の状況を理解出来なかった。

まるで、映画の中での撮影のような錯覚だとさえ思えた、そのような撮影場面を演じている長いシーンのつづきのような錯覚に思いたかった。

監督からいつかは「カット」の声がかかり、暗闇は、光が射し、眩しいほどの、輝く世界に戻れると何度も思えた混乱する精神状態のだった。

病室の中で、純輔はベットに横たわりながら、少しずつ、少しずつ、夢だったのか現実起きた事だったのかを思い起こして行った。

幸いにも、仕事は、大半が終わっていたので、純輔が立ち会わなくても、高津さんや伊達さんが手助けをしてくれた事で、十月入ってすぐに、アラスカのドキュメンタリー映像取材は完了した。

後は、日本へ帰国してからの編集作業があるだけになって、純輔はまだ眼の視力が快復していないまま、帰国してそのまま、カコの入院している、同じ病院の眼科に入院した。カコへはまだ、純輔が事故にあった事は知らされてはいなかった。

相変わらず、カコの病状は悪くて、時折意識を無くしては両親はその度に、緊張して不安が募る辛い状態だった。

けれど、純輔の所属事務所から、カコの両親へは、連絡があり、純輔がアラスカで事故にあった事を知らされた。

帰国と同時に、カコの入院してる同じ病院の眼科に入院した事も伝えられた！

その時、純輔の右眼は光を取り戻す事がないだろうと、知らされていたが、カコの両親は一途の望みを持って、祈るしか方法はなかった。

今の日本の医学は、世界のどの国よりもすぐれている！

きっと、最先端の医学を持って、もう一度、眼の手術をすればきっと、視力は快復して、光を取り戻してくれると、思いたかった。

いつかは、自分たちの息子として、カコと幸せに暮してほしいと願っている！

「愛する義理の息子、純輔だ！」

純輔の姿を見たカコの両親は、変わりへて、憔悴しきった純輔の無気力な姿！

やはり、純輔は日本に帰国しても、思うような視力の快復が得られず、又、愛するカコがなぜ、自分を避けているのだろうか！

なぜ、カコは私のそばに来てくれないのかが、気になって仕方なかった。

カコの胸の手術の結果も聞かされていない中で、起きてしまった純輔の事故により今は暗闇の中で手探りで生きているふたりを結び繋げる糸は切れてしまったのだろうか・・・

(四十三)

純輔はひどく混乱していた、突然の闇の世界に閉じ込められて、心が惨めだった、寂しさにココに思い切り抱きしめて欲しかった！

そう思う気持ちとは裏腹に、心の何処かでは、このような弱い姿、惨めな姿を、ココに見せたくない思いも確かにあった。

けれど、どうしても聞かすにはられない、純輔は、思い切って、ココの事を、たずねた！

けれど、ココの両親は、しばらく沈黙の後、深呼吸するように・・・

「せっかく、純輔さんが、アラスカから帰国できたのに、すみませんね！」

「軽い感染症にかかってしまって・・・」

「今、ココは、すこし、熱が出てね！」

「ドクターに病室を出る事を止められているのよ！」

「もう少し快復するまで待っていてくださいね！」

「私たちも、ココに中々あえないのよ・・・」

そう言うだけが、精一杯の両親の言葉だった。

ココの両親は、とても、今のココの状態を純輔に話す事は出来なかった。

純輔が今どんな状況であれ、ココが乳がんの手術をする事だけアラスカへ行く前につたえていたが、今、肺への転移とおそらくは、胃や脊髄へも、転移の疑いもを考えられるとの診断されていた！

ココの体力の快復を待って、急ぎ、改めて肺の手術が待っていた！

けれど、ココの乳がんはもう、乳房の摘出だけでは、手の施しようも無いほどのがんの進行が早く、絶望的な状態だった！

純輔もまた精密検査の結果、やはり、アラスカの病院での診断と同じく、左眼は、視力の快復が望めるが、右眼は視力快復が望めない事がはっきりと診断された。

人の運命は、明日の事も予想がつかないし、分からないと、良く、聞く事だけれど、まさか、自分の身に起きるとは思ってもいなかった。

純輔は待っても、待っても、ココは逢いに来てくれない事の不安と自分自身の暗闇の恐怖でかなり苦しく、混乱の日々がつづいた。

だが、純輔の持ち合わせている、本来の精神力で、片目でも、確かに、不自由ではあるが、生きて行く自信を取り戻し始めていた。

純輔の正式な、検査結果では、右の眼を移植手術によって、以前のような、健康な眼を取り戻す事も出来るとも、説明されていた。

その事を、純輔は、すべてにおいて、まるで、純ちゃんと私の両親は、実の親子のように、話し合い、相談しあっているながらも、私の両親はココの現実を隠したままで、純輔へのかりそめの喜びを分かち合った。

その事は、私の現実を、純ちゃんへ話す事は！『絶対にダメ！』

私は、この先の事を思うと、少しでも、純ちゃんが希望を持って生きていて欲しかった、辛くて、悲しみの現実を知る事は、後からでも間にあうし、現実を知る事は、たとえ一日でも先であって欲しかった。

「眼球の提供者は、中々出てはこないと思うけれど！」

「僕は、まず、左目の治療に専念して！」

「右目の提供者が現れた時には！」

「ありがたく、感謝して頂き、その人の分も眼を大切に！」

「すこしでも長く、生きて行くつもりだ！」

「たぶん、提供者の方は！」

「たくさんの思いを残しての人生が終わるわけだろうからね・・・」

両親から、純ちゃんのようにすを聞きながら、やはり、彼は精神的にも強い人だと確信した！

(四十四)

カコは純輔の姿を想いながら、両親の話を聞き、まだ、両目とも、何も見えてはいない状態でも、希望が持てる純輔の姿を思い浮かべて少し眩しく感じた。

カコは今すぐにでも、純ちゃんに逢いたかった！

「声を聴きたいし！」

「抱きしめて欲しい！」

そう願いながらも、カコはベットから起き上がる力も無いほど急激に体が弱っていた。

カコは両親から、純ちゃんのようにすを残さずどんな些細な事でも聞いてはいても、姿を観て確かめたかったが、その勇気が出てこないし、体が動いてはくれない！

あの感の鋭い純ちゃんのことだから、すぐに私の変化に気づいてしまう、たとえ、今は何も見えなくても、私の今の状態を見抜いてしまう、私は、ベットから出てはいけないとも思った。

純ちゃんの眼が、左目だけでも、視力を快復するまでには、私自身の今の状況を改善させなくてはいけないとかたく決心した。

必死で体力をつける努力をして、やっと何とか体を動かせるまでに快復して時、母に頼み、起こしてもらい、車椅子に乗せて貰って、純ちゃんの姿をそっと遠くからみて純ちゃんの痛々しい姿を確かめるしかなかった。

声もかけられず、お互いを励ます事も出来ずに、じっと、その場所から、自分が耐えられる間をぎりぎりまで、純ちゃんを見ていた。

純ちゃんは一人でぼつんとイスに座ったまま、窓の方を向いたまま動かずにその場所にいた。

すこし時をおいて、私の父が純ちゃんのそばに行った！

純ちゃんに何か、話しかけて、窓際から、ベットの内側に、父に手を取られながら純ちゃんは移動した、私が純ちゃんを寄りっきりと見れる位置の場所へ、父と共に移動してくれた。

しばらく、私は呼吸さえも抑え気味にして、純ちゃんが私に気づく事を心配した。

母と私は、声を出さずに、うなずきあいして、その場所を離れた、何度も振り返りながら、純ちゃんの姿を追って、見ていたけれど、やがて、エレベーターが私を運んでくれて、私のいる部屋、5階についてしまった。

純ちゃんが入院している眼科病棟は7階だった、わずかの位置に純ちゃんはいても、私に逢えない事が不振感を募らせて、純ちゃんは今まで私たちに見せた事のない我儘な言葉で、父に何度も問い、聞こうと、父を呼び出す！

私の電話には繋がらない事が、とても気がかりのようで、時には・・・

「なぜ、カコに逢わせてくれないのかと詰め寄り、いらだつ様子だと・・・」

父は、そんな時、「カコは体調がすこし悪いので、家にいる！」

「君の事故の事は、カコにはまだ話していない！」

「君の今の状態を見たら、きっと、驚くし！」

「心配して、カコの体によくないからね！」

「せつかく、退院出来たばかりだから・・・」

「もう少し、待ってくれないか？」

そうなのです、純ちゃんには、私は、退院した事になっていたのです。

(四十五)

私の病気は、乳がんの初期だったと、両親から、純ちゃんに伝えられていたのです。

純ちゃんには、私は乳がんの手術も成功したが、すこし、快復が遅くて、大事を取って、退院後も家で静養していると伝えられていた。

「元々の持病である、免疫の低下もひどく！」

「今は感染症に気をつけて生活しなくてはいけないから！」

「カコは外出をドクターからとめられていてね～」

父は純ちゃんに対してつらい嘘を重ねるしか方法がなかった。

今、純ちゃんの眼が見えない事が私はとても心配だけれど、私は、乳がんだけではなく、すでに肺に転移していて、おそらくは脊髄と胃にも転移の兆候があり、体力の快復を待って、検査をするのだとは、純ちゃんに正直に言えない事だった！

純ちゃんの左目がある程度視力が戻ってきた時に話せば、きっと、純ちゃんは、分かってくれるはずだと、私が判断して、両親に頼んで、固く口止めをしていた。

私の体はそう簡単に体力が快復するほどの病状ではなかった。

それでも、ひと目、純ちゃんの姿を見た事で、私は不思議と気力が出て来て、奇跡的に、検査を受けられる状態に体力が快復した。

その絶好の機会を逃さずに、私は検査を実行した、ベットからひとりで起き上がれないほどの衰弱した私の体は、又しても、純ちゃんからの元気エネルギーを少しだけ分けてもらったように思えた。

まず、急を要する脊髄の検査と胃の検査を受けて、その後に全身の検査がおこなわれた。

その結果は、あまり時間を置かずに結果はわかった。

あまりにも、ショッキングな結果が報告された！！

肺への転移はすでに、乳がんの手術で分かっていたが、もう、手術出来る状態ではなく、脊髄にはまだ転移はしていなかったが、胃への転移は、間違いのない状況だった。

しかも、進行の早い「スキルス性胃がん」で、手術は難しい段階だとはっきりと検査結果が出た！

ドクターの話す言葉が、何処か遠い異国から来た、ロボットの機械音のように聴こえて、私は、自分の事として、直ぐには受け止められなかった。

ただ、体の中を通り過ぎて行く言葉なのか音声だけがこの耳に聞こえていた！

私のいる病室の窓から眺める景色は、昨日と何も変わっていないのに、なぜか、どの樹木も赤茶けて光もなく、薄黒く見えて、とても美しいなどとは言えない色彩だった。

そうかと思えば、誰かが何の為なのか？私に拍手を贈っているような錯覚がして、怒りがこみ上げてくる！

そして、その日を境に、病院での治療も私に接するすべての人々の態度も急に粗末で不親切になった気がした！

ただ、点滴を絶え間無く打ち、私の体に毒物を注入しているような悪意さえ感じてしまう！

ベットから起き上がれない体が疎ましくて、怒りといらだち、誰、かれ、かまわずに八つ当たりして見たりと、自分がだんだん惨めで、嫌な人間に変わっていく姿を、私自身は体からはなれた場所で自分の姿を見ているような感覚だった。

(四十六)

現実の私なのかさえ理解出来ない精神が定かではない、そんな状態と全身の痛みは同時進行で、私をいたぶり続ける！

もうだいぶ前から、あの身体中が痛かったのは、こんな悪い物が私の体に棲みついていたからだったのかと思うと、今更ながら、鈍感な自分が嫌になって来る・・・

あの衝撃を受けた告知を受けた時から、どの位の日々が過ぎたのか、相変わらず、私の体は、点滴のチューブにがんじがらめになって生きていた。

はっきりしない意識の中で、ふと、純ちゃんは今どうしているのだろうかと考えて、私はうなされるように、突然、両親に問いただしたが、しばらくの間、ふたりは黙ったままだった。

そして、父と母は覚悟をして思いつめたように・・・

「純輔君、まだ、あの時のまま、両方とも眼は見えないんだ！」

「左目もまだ、視力は快復してないんだよ！」

「御医者さんは、もう、とっくに、左目は見えるはずだと言ってるけどね！」

「もう、眼の怪我は綺麗に治っているけれどね！」

「どうしてなのか、不思議な事だそうだよ！」

両親の話す言葉がだんだんと私の意識から遠のいて行く、ただ、純ちゃんの顔が浮かんで来た！

あの美しく、微笑んでくれた笑顔と私をあの凄いオーラエネルギーの渦の中に巻き込んでしまいそうな素敵さで・・・

時にみせる、うつむきの愁いを！

純ちゃんにしか存在しない、あの『潤んだ美しき瞳』

ただ、あの『美しき姿』を、私は今、はっきりと思い出していた。

その時、なんだか分からない感情と感覚で、自分の体が宙に浮かぶように軽くなったように、そして、何の痛みも無いようなそんな気がした。

私は無我夢中で、自分でベットから起き上がろうとしたがやはり力がなかった、そして母に手伝って貰い、車椅子に座った。

そして、とっさに、今、純ちゃんに逢いに行こう！母にすぎるように言い、願い出た。

「純ちゃんに逢わせて！」

「純ちゃんに話さなくては！」

「きっと、眼は大丈夫だからと！」

「純ちゃんに伝えなくては！」

「私は純ちゃんの奥さんになるのだもの・・・」

「きっと、待ちくたびれているはずだから！」

「逢いに行かなくては・・・」

「伝えなくては、純ちゃんの眼は、大丈夫だと！」

私は全身の力で母に訴えるように言って、母とふたりで純ちゃんの部屋に急いだ！

(四十七)

純ちゃんはひとりでぼんやりと見えない目で窓の外を見ていた、私はそっと純ちゃんに近づいて・・・
渾身の力をこめて、元気なふりして、銃ちゃんに声をかけた！

「純ちゃん、お待たせ！」

「ずい分長く待たせて、ごめんなさい！」

「私、やっと外出が出来るようになったの！」

それだけ言って、純ちゃんの手を握って・・・

「本当は、ハグしたいけど！」

「ごめんなさい、今、ちょっと、飲んでる薬のせいでね！」

「体が匂うから、ダメね！」

「純ちゃんが良くて、私が恥ずかしいからダメなの・・・」

「今日は、やめてね！」

「明日はきっと、大丈夫よ！」

そんな、当てのない約束を言ってしまった。

私の体は確かに薬焼けとでも言おうか、自分でも気になる嫌なおいがする、けれど、もっと、辛いのは、私の体がげき痩せしている事を、純ちゃんに知られたくなかった。

本当に短い、純ちゃんとの母親同伴のデートだった、あまり、長い時間は、純ちゃんの感のよさで、私の変化を感じてしまう事を避けた。

その帰りに、純ちゃんの担当医を尋ねてに聞いて確かめてみた！

確かに、純ちゃんの左目はもう、完治しているので、精神的なもので、見えていないが、たぶん、右目の眼球移植をした時に、おそらくは、両目、同じように見えてくるだろうと言われて、私は、決心した！！！！

『先生、この私の眼を、純ちゃんにあげてください！』

『私のこの眼は、まだ、がん細胞に侵されてはいません！』

『とても綺麗で視力も良い状態だと、保障されています！』

『今の私の状況から考えても！』

『不思議なくらい、なんの病気にも侵されてはいない！』

『とても綺麗な、眼だとドクターに言われています！』

純ちゃんの担当の眼科の医師は、一瞬、驚いたようだったが・・・

「落ち着いて！、落ち着いて！」と、言いながら・・・

まるで、慌てているのは、医師のほうだった。

「まあ～座ってください！」

もうその時には、私はすでにイスに座っていた。

そして、まだ、脊髄には奇跡的に転移していない事や私の今のがんの進行状況を話し、少しでも早く！

おそらく、近い内に、私は命の終りの時期が来る事を覚悟している！！

だからせめて、この眼だけでも健康な内に、純ちゃんに移植して頂き、私の命が終わった後も、私は純ちゃんの中で生きて、この世界を見ていたい！！

(四十八)

私は真剣だった！本気で純ちゃんに眼の移植手術をしたい事を話しても、眼科の医師は簡単には納得してくれなかった。

もちろん、私の両親も最初はとても驚き、反対だったけれど、何度も、何度も、私は倒れてしまうほど真剣な思いで両親に話して・・・

「もう時間がないの！」

「この方法しか、私は純ちゃんの愛情に応える事が出来ない！」

「だから、パパもママも、私の気持ちを理解して！」

私は必死だった、純ちゃんに私の命を託したい想いがあった！

この方法が、すべてに、最良の事だと、私の決心は変えようが無い事だった！

私の意志の固さを知った両親と私の担当医が純ちゃんの担当医に状況を説明して・・・

「私の存在が消えてしまっても、私は光の中に存在する！」

「純ちゃんと共に生きられると思えた！」

「私は死ではなく永遠に純ちゃんの中で生きられる！」

「姿こそ消えても、純ちゃんの光になれる事が幸せだった！」

「こんな素晴らしくて、幸せな事は他にないのだと、私は思った！」

私の周りにいる、ひとたちに分かって欲しい！

そう、説明する事しか出来ない！

ただ、純ちゃんが事の真実を知った時のショックが大きい事は予想がついたので、両親にも、もちろん、医療関係者にも、純ちゃんには秘密にして貰う事を、硬く約束して頂き、私の眼を純ちゃんの右眼に移植手術される事が決定した。

私の体はもう、猶予のない！時間との勝負だった。

私は、がんの治療はもうだいぶ前にやめていた、ただ、痛み止めだけは使わずに入られなかった。

だから、眼に対しての副作用がとても気になるけれど、強い痛みには、耐える事が出来ない！

そして、純ちゃんへの眼の移植手術は、突然のように、始まって、私の右眼は純ちゃんの中で、生き始めていた。

私の中にある右眼は当然、義眼だけれど、今の医学技術は、本当に素晴らしい！誰が見ても、義眼だとは疑う人はいない！

私の日常はもう自力では動けない為に、見えるのが左目だけであっても、さほどの不都合はなかった。

私の眼のかわりをしてくれる母は今まで見たこともない気丈な人間に変わっていた。

常に私に付き添い、疲れを見せずに、看病してくれて、たいていは、私は何が欲しいのかを伝える前に気づいてくれる母だった。

だから、純ちゃんの手術が成功だった事も直ぐに伝えてくれたが、その後の経過を中々話してくれない事が、私は気がかりだった。

私は自分から尋ねる勇気がなかった、こんな私の眼では、純ちゃんに悪い事が起きてしまうのではないかと、不安な気持ちが広がって行く・・・

するともう止めようのない恐怖感が私を包んでしまう・・・

両親の元には、連絡が来ていた！

純ちゃんの移植手術は成功したが、まだ、視力は何も見えないままだと言う事だった。

(四十九)

カコの両親は、純ちゃんの眼の状態が見えないまままで変わらない！その事を伝える事が出来ない！、娘の自分の命をかけて実行した事が、まだ、何の成果も見られぬ！

とても、そんなふうには、話せない、父と母の苦悩する思いだった。

両親の心の隅には、まだ、カコの行為が認められない、純ちゃんへの眼の移植手術に違和感があったのは確かだった。

淡い願いだけでも、娘の身に奇跡が起きて、がん細胞が消える事があるかもしれないと期待していた。

そして、娘カコに残された時間は特別な存在によって何かをもたらせてくれるのではないかと願う、信仰心の持たない親であっても、見えない存在に祈りを捧げたとしても当然の思いだった。

たとえ、完治する事が出来なくても、ベットから起き上がれて、もう一度、笑顔を見せてくれて、そうだ！、昔のように、家族で旅行が出来るかも知れない！

そんな、虚しい夢を見ていたから、純ちゃんへの移植手術は、親としては認めたくない、娘は自分から命の灯を消してしまうような行為にしか受け取れずに、両親は苦しんでいた。

カコはその事も十分に承知している事だし、何度も話しても、親としては理解出来ないだろうけれど、私の気持ちを優先させてくれた！無謀とも思える事に同意してくれた両親の愛情の深さに感謝していた。

カコはもう、一日の殆どを、ベットに横になる生活の中で、夢ばかり見ている。

いつも、同じような夢ばかりだった。

カコは夢の中で自分の姿を見ていた、何処かの草原を裸足で走っては、遠くで誰かが私を呼んでいる、そんな、同じような夢だった。

そして、草や小さな花からの夜露に濡れた足の冷たさでいつも目覚めては悲しみだけではない、言い知れぬ幸福な感情にもなっていた。

そんな日々のある日、夢なのか現実なのか！突然、純ちゃんは、私の前に現れてあの力強い腕で、私を抱き起こしてくれた！

「カコ、何をぐずぐずしているんだよ！」

「いつまでも、寝てばかりいてはダメだよ！」

「さあ～急いで支度してよ！」

「どうしても君と一緒にいきたいところがあるんだ！」

「やっと、カコを迎えに来れたよ！」

「本当にながく待たせてしまったね！」

「もう、大丈夫だよ！」

「僕は元気だからね！」

「今日はふたりの特別な日だね！」

「いつまでも、寝てばかりいたら、僕は・・・」

「僕はどうすればいい・・・」

「そうだよ！、起きてくれないと、怒っちゃうからね！」

そう言って、私を着替えさせてくれて、抱きかかえて歩き出した！

純ちゃんは、とても元気で、眼もよく見えているようだった。

「カコ、実はね、今日は、僕が、ハリウッド映画に出演した映画！」

『遠い祖国』

そう、そうだよ！、「遠い祖国」の日本公開の初日なのだよ！

だから、僕とカコは一緒じゃなきゃダメなのだよ！

ふたりが一緒に観れなくちゃ、カコも悲しいだろう、怒っちゃうだろう・・・

(五十)

純ちゃんは笑顔で言った、けれど、今日は！「そ・の・前・に」君との約束を果たす日だよ！

「今日は、何も言わずに！」

「僕の後について来てくれるね！」

私は返事をしたいけれど、声が出ないようで、言葉にならないから、心で答えた。

「純ちゃん！、それは無理よ！」

「だって、私、純ちゃんに、抱っこされたままだから・・・」

「純ちゃんの後ろからは、ついて行けないわ～」

そんな会話をお互いの心で話している時、街角の小さな教会の前で、純ちゃんは、立ち止まり、教会の扉が自然に開いて、たくさんの美しいお花に飾られた、バージンロードが遠くまで広がっていく・・・
純ちゃんは私を抱きかかえたまま、バージンロードを進み、十字架の前で！

『カコ、約束だよ！』

『頑張って、ふたりで生きて行こうね！』

『今日が、ふたりの生活が始まる日だよ！』

『ずっと、ずっと、毎日、君を愛して行くよ！』

『だから、君も約束してほしい！』

『僕をいつまでも愛していると言ってほしい！』

『愛してると！言ってほしい、まだ、聴いていないんだ！』

『君からの愛してるの、言葉を！』

純ちゃんと私は永遠の愛を誓い合った！

私の微かな意識の中で、純ちゃんとふたりだけの試写会場に居ようだった。

純ちゃんの出演したハリウッド映画『遠い祖国』を観ている、大きなスクリーンが、何度も、何度も、純ちゃんのあの愁いのある瞳をクローズアップを映していた！

他に誰もいない、たったふたりだけの公開初日を！

純ちゃんと私は公開日とヒット願いながら、お祝して、ワインを酌み交わしている！

もちろん、カコは飲めるはずも無いけれど、口の中でわずかにワインのかおりで潤った。

そして、カコは、純ちゃんにつたえた！

『純ちゃん、おめでとう！』

『とても、素晴らしい演技でした！』

『とても素敵な感動をありがとう！』

『これからもずっと、素敵な人でいて！』

『私に感動を届けてね！』

『私の大好きな俳優でいてね！』

そう伝えるのがやっとだった！カコは本当に幸せだった！

確かに、三十数年のあまりにも短い生涯ではあっても、こんなに素敵な「純輔」という男性にこんなにも深く愛されて過ごした私の人生は幸福な日々だった・・・

「夏湖」はもう何も思い残す事も、悔いも無い喜びに満たされていた・・・

「いつかふたりは別の世界で寄り添いながら比翼の鳥に生まれかわり天高く舞う事を願いながら・・・」

カコは、純ちゃんの胸の中で抱かれたまま、幸せな心で、ゆっくりと瞳をとじて、意識がかすかに、かすかに、薄れて行く・・・

(五十一)

純輔は夏湖をしっかりと胸に抱きしめたまま、しばらくはそこを動こうとはしなかった！

人は誰でもがかぎりある命、私のその命の一部が純ちゃんの中で生きつづけられる喜びにあふれて私は旅立つ！

いつの日かきっと又出逢えると約束を交わして・・・

純輔は、夏湖がなくなってから、すべてを知った！

純輔はあまりにも衝撃が大きくて、混乱と苦悩する日々を、しばらくの間、アラスカで暮した、俳優としての仕事を一切止めて、まるで、世の中から自分の姿を消してしまいたいように思いながら暮していた。

夏湖の純輔への遺言と言うべき物はなかった、ただ夏湖の両親から渡されたいくつかの遺品をまだ純輔は開けて見る事が出来なかった。

夏湖は生前に純輔へすべての想いを伝えていた事で、遺言書は書いていなかった。

純輔は傷心の中、アラスカで暮していて、高津さんや伊達聡介さんの心遣いに救われる思いだった。

お二人との年齢も近い事もあり、さりげない気遣いが嬉しかった、また、釣りを進めたばかりに、事故にあった事に責任を感じていた、あの女性、三島美佐子さんが、純輔の面倒を見てくれていた、自分の家からすこし離れた場所にある、作業所を、純輔が住めるように改造してくれて、何くれとなく世話をしてくれた。

純輔は夏湖が亡くなった事も認められず、夏湖のいないこの世界で自分がなぜ生きているのかが不思議だった。

なぜ、ここ、アラスカに来たのかも考えずに、無意識に体だけが行動させてここに来てしまった。

そしてどのくらいの日々をアラスカで暮していたのか・・・

何をして暮していたのかも、しばらくは純輔の記憶の中には消えていて無かった！

ただ時間だけが過ぎて行った。

そんな中で純輔は生まれ持った生命力の強さから、少しずつ、自分を取り戻して、やがて、精神的に不安定ながら、純輔自身に戻って行った。

そのきっかけは、純輔と夏湖がふたりで良く見た映画のポスターだった！

純輔がその時生活していた作業小屋には、三島美佐子、彼女が若い頃大切にしていた記念の品がまとめられていた。

その中にあった！

映画『ニュー・シネマ・パラダイス』の古いポスターだった！

純輔と夏湖はこの映画が本当に大好きだった、だからこの長い映画を観られる時間がある時は、どちらかともなく、選んで、DVDを手に取り・・・

「ねえ～これでしょう！」

「また、観たい気がしない、純ちゃん！」

そんなふうに「夏湖」は言って、純輔にねだるのが得意だった！

この映画を観ては、ワンシーン、ワンシーン、お互いの好きな場면을競い合いながら、常にふたりは新しい発見を語り合い楽しんでいた。

そんな思い出が、純輔は悲しみと苦悩の中から、這い上がる力を、いつも、「夏湖」が語りかけているように、感じて、日本へ帰国する事になった。

しばらくは、仕事もなかったが、純輔は焦らずに、仕事の以来を待っていた。

そして、又、脇役からの再出発だけれど、俳優として演じられる事の喜びを純輔は感謝していた。

俳優としていろいろな役柄を丁寧に演じながら、時はゆっくりと過ぎて行った。

純輔も今は50歳を過ぎて、中堅の俳優として、認められて、今は、主役を演じてはある演技賞に輝いて、又、脇役でもあっても純輔の感性のうごく作品には迷うことなく出演し、高評を受けていた。

夏湖がなくなってからは、仕事も前のように、忙しくて困るほどはせずに、時には演出を手がける事もある、有意義な生き方で、自分の感性が求める仕事を選べる立場にもなれた。

純輔は、ふと、自分が生まれ、育った、故郷を訪れてみようと思えるのだった。

高校を卒業と同時に、故郷を逃げ出すような思いで、家を出た、故郷！

（五十二）最終話

純輔の父の家は日本海に鳥海山の長い影を映す秋田県のある町！、鳥海山の山すそが広がる場所にあった。

大きな町の郊外に秋田杉の製材工場と販売を手広く取り扱う会社を営む古くから代々引き継がれた家だった。

父はどちらかと言えば、材木商よりは、とてもワインに興味を持ち、ワイン作りの夢を持つ人だった！又、絵画にも精通していた人で、特に、セザンヌやモネ、シャガールなどの絵画を数点所蔵していて、自宅の隣に小さな美術館を開いた事をだいぶ以前に、純輔に知らせて来た事があった。

純輔が家を出たのち、数年が過ぎた頃に秋田杉の商いをやめて会社を父の友人に任せて、純輔の父はワイン作りに取り組みだした。

住まいも母と純輔が過ごしていた、田沢湖畔の家を小さなホテルとレストランに変えて、そしてワイナリーを経営して成功していた。

現在では味と香しい香りのワインで知られたワイナリーとして、地元やワイン好きの人であれば、一度や二度は聞いた事のある銘柄で「ときの翼」の醸造元だった。

母は純輔がまだ幼かった頃から病弱で、病氣治療の為に田沢湖畔にあった別宅で母とお手伝いさんに育てられた。

純輔が幼かった頃は秋田杉の製材工場が忙しくて、父はたまに母の見舞いに来る程度でしか父に会うこともなく成長した為にどうしても何処か馴染めない他人のような感覚で接していた。

母は純輔が中学2年生になったばかりのあの日、真冬の寒さが厳しい日に突然なくなった。

母は純輔にとって、特別な存在だった！

父が仕事が忙しくて、一緒に生活していない事で、馴染めない存在だったから、純輔にとっては母はすべてにおいて特別な存在だった気がしていた。

そんな大切な母が亡くなって一年も経たない頃に、父は再婚した！

しかも、その人は、純輔が初恋ともいえるの淡い想いを抱いていた女性で、まだ、二十歳を少し過ぎたばかりの眩しいほど美しい人だった！

純輔の母方の遠い親戚筋に当たる女性で、時々、純輔の勉強を見てくれる、母代わりであり姉のような、又、思春期の純輔にとって、異性として始めて意識した女性だった！

純輔の未成熟な精神と肉体のぎこちない想いで、彼女の美しさが眩しくて、ときめき、胸が苦しくなるほど大好きな女性だった。

母が亡くなって、父とこの女性が結婚して、純輔は田沢湖畔の家を離れて、父の住む家に越してから、広い大きな家の中で、純輔と新しい母はふたりきりになる事が多くなった。

そんなある日、純輔は新しく母になった憧れの人に恋しさと、思春期の胸の苦しきから、たった、一度、恋しさを告白して、手に触れ、握ってしまった！

そして、思わず、自分の胸に義理の母の手を押し付けて、こんなに苦しいのにと、自分の想いを打ちあけてしまったが、何も変わらない現実！その後の、義母との一緒に生活の日々は、純輔にとって、地獄だった。

だから、高校を卒業したその日に、家を出たのだった。

その後は、秋田での自分を忘れる努力で生きて来て、故郷へも、実家にも、それ以来一度も帰っていなかった。

父はもうすでになくなっていて、母の違う妹がいるはずだけれど、その妹にも一度も会ったことがない！

父が亡くなった時に連絡をして来たけれど、純輔は、父に別れを言う気持ちにはなれず、葬儀にも出ていなかった！

父が亡くなった時は、純輔にとって、一番大切な、「カコ」が亡くなって、すこしの時期が過ぎた頃の事だった。

故郷を離れてもう四十年近い歳月が過ぎて行った。

純輔は、過ぎ去った歳月の思い出がまるで、映画のシーンを早回しするように次々と浮かんで消えて行く・・・

田沢湖畔の家に向かう車窓から見る風景はあの「秋田駒が岳」のうっすらと雪をつけた美しい姿に胸の鼓動が早打ちするほどの懐かしさと喜びに似た緊張感に酔うような思いになった・・・

そして田沢湖を左に見て少し車を走らせた場所に黒い土塀が眼に入ってきた、あの懐かしい故郷、大切な母と過ごした場所、純輔が育った家の前に立った！

門の扉が開き、純輔を迎えてくれた、若い女性の手にかかれた小さな女の子を見た時！
あまりにも「カコ」の面影に似た、幼い姿に衝撃をうけて、心はさわぐ不思議さを感じた。

この愛くるしい笑顔、幼さの微笑み！、小さな女の子の雰囲気あまりにも、純輔の愛した人！
「杉本夏湖」によく似ていた・・・

だが、この子は、純輔の姪の梨沙ちゃんだった。

お互いの挨拶を済ませて、純輔この幼い女の子を抱き上げた時、長く心の片すみにある、不思議な感覚の疑問が消えて行ったような思いになった。

『ああ～この出逢いがあったから、私はどんなに望んでも『カコ』とは男と女の契りに踏み込めなかったのだろうか・・・』

輪廻転生、人は生まれ変わり・・・

『ねえ～純ちゃん、可愛いでしょ・・・』

『私たちには叶わなかったけれど！』

『今、目の前の姿が、本当に可愛い！』

『純ちゃんと私の夢と希望が実現したように想うの、そんな気がしない！』

『命は永遠に引き継がれて行くのね～～～』

『私、きっと又出逢えるわ、純ちゃんにね～～～』

ふと、純輔の心に「カコ」の話す、囁く声が聴こえたように純輔は感じて・・・

日々の命の営みが時に貴方を欺いたとて

悲しみを又いきどおりを抱いてはいけない

「プーシキン詩集より」

『完了』

恋しくて <永遠> 下巻

<http://p.booklog.jp/book/33989>

著者：みしまゆみこ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/hsa33712/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/33989>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/33989>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.